

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：33305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07308

研究課題名(和文) Foreign Entertainers and English Drama in the Age of Charles II

研究課題名(英文) Foreign Entertainers and English Drama in the Age of Charles II

研究代表者

三好 力 (Miyoshi, Riki)

金沢学院大学・文学部・講師

研究者番号：30780788

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：王政復古期演劇研究の対象として取り上げられることが少ない、当時ロンドンで活躍した外国人の俳優・芸人たち(主にフランス人とイタリア人)を研究対象に選んだ。本研究課題では特にチャールズII世が統治をしていた時代(1660-1685)に焦点を当て、資料収集を行うと共に彼らがどのようにその時代のイギリス演劇に影響を与えていくかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The Restoration period saw an unprecedented influx of foreign talent to the London stage as Charles II personally invited many of them from France and Italy. Yet there have only been a handful of studies on these foreign theatrical entertainers. For this project, I have collected information concerning foreign entertainers who were active on the London stage during the reign of Charles II and analyzed the importance of their contribution to the development of Restoration drama.

研究分野：王政復古期演劇

キーワード：theatre history

## 1. 研究開始当初の背景

王政復古期時代は数多くの外国人俳優・芸人・劇団がロンドンの劇場で活躍した。演劇好きのチャールズII世はフランスやイタリアからの劇団を呼び寄せていたが、このこともこの時代の背景に貢献している。しかしながら、多くの芸人たちが活躍したにも関わらず、彼らに関する研究は数少なく、かろうじて出された論文や文献は20世紀初期に出版されたものに限られている。例としてEmmett L. Averyの‘Foreign Performers in the London Theatres in the Early Eighteenth-Century’, *Philological Quarterly* 16 (1937), 105-23は1937年に出版され、研究対象となった年代は1718年以降となっており、チャールズII世の時代は入っていない。

また、W.J. Lawrenceの‘Early French Players in England’ *Anglia* (1909), 61-89は1909年に出版された論文である。研究の対象年代は15世紀からであるが、17世紀の外国人俳優・芸人の研究は余り含まれていない。その上、この論文はフランス人の劇団を中心に研究されており、その他の外国人は研究対象とはなっていない。Sybil Rosenfeldの*Foreign Theatrical Companies in Great Britain in the 17<sup>th</sup> and 18<sup>th</sup> Centuries* (London: The Society for Theatre Research, 1955)は非常に重要な文献であるが、17世紀を取り扱っているものの、英国にきた外国の劇団をリスト化しただけのものであって、彼らがどのように英国の演劇史上で重要な役割を果たしたかについては分析されていない。このように17世紀の外国人俳優・芸人・劇団を扱った論文・文献は少なからずあるにはあるが、このテーマの研究においてはまだ開拓の余地があると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は大きく分けて二つある。一つにはチャールズII世の統治の時代(1660-1685)に外国からやってきた俳優・芸

人・劇団について調査することであった。具体的には、彼らはどのような人物であったのか、いつ頃ロンドンに来たのか、また上演を通してどれくらいの集客ができたのか、どのような内容の演劇を上演したのかなどを知ることを目的とした。

もう一つの目的はそれらが王政復古期の演劇にどのような影響を与えたかを解明することであった。まず、イギリスの劇作家たちが外国からの俳優・芸人をどのように考えていたのかを明確にする必要があった。よって、その時代の劇のテキストを読むことによりイギリスの劇作家やイギリスの劇団が外国人の俳優・芸人・劇団に対してどのような対抗策をとったかが理解できる。また、時代により彼らに対する態度が変化したかどうかを読み取る必要もあった。同時に、当時の時代背景や政治的なイベントなどが外国人の俳優・芸人に及ぼした影響についても考慮すべき情報だった。

## 3. 研究の方法

本研究はその手順を大きく二つに分けた。

1. 本研究課題の関連文献の調査
2. 一次文献・資料(日記、手紙、記事等)の分析と劇テキストの精読

当時ロンドンの劇場にやってきた外国人の俳優・芸人の詳細を把握するためにSybil Rosenfeldの*Foreign Theatrical Companies in Great Britain in the 17<sup>th</sup> and 18<sup>th</sup> Centuries*と1660年から1800年の間にロンドンの劇場内で上演したことのある人物の氏名と人物紹介が載っている人名辞典、*A Biographical Dictionary of Actors, Actresses, Musicians, Dancers, Managers and Other Stage Personnel in London, 1660-1800* (Southern Illinois University Press, 1973)を照合した。

上記の方法でロンドンを訪れた外国人の俳優や芸人の詳細を明らかにすると同時に、王政復古期の劇場上演カレンダーである*The*

*London Stage, 1660-1800* (Southern Illinois University Press, 1961)を参考にし、実際に彼等が劇場で何を上演したのか、どれほど頻繁に上演したのかを調査した。しかし、*The London Stage, 1660-1800*等では写本に対する情報が十分に得ることが不可能であったため、英国に渡り調査する必要があった。その為、オックスフォード大学の図書館やBritish LibraryやPublic Record Officesに行き、実際に写本を見た結果、有効な情報を得ることが出来た。

一方、批評家や観客が外国人による上演をどのように評価したかを知るために、当時の観客の手紙や日記等を参考にした。具体的には王政復古期の代表的な観客であったSamuel Pepysの10年近くにわたる日記やJohn Evelynの日記、*The Travels of Cosmo the Third, Grand Duke of Tuscany, Through England during the Reign of King Charles the Second* (London, 1821)の手紙類を調べた。また、オンラインでのデータを収集するに当たっては、*Early English Books Online*や*Eighteenth-Century Collections Online*から情報を得た。

他方、王政復古期時代に書かれたプロローグやエピローグを見ると、当時のイギリス人の俳優たちがどのように外国人の俳優・芸人を見ていたかが分かる。従って、Pierre Danchinの*The Prologues and Epilogues of the Restoration 1660-1700* (Nancy: Publications de Publications de l'Université de Nancy, 1981-84)を検証した。演劇に関しては彼らが強く影響を与えたと思われるEdward Ravenscroftの*Scaramouche a Philosopher* (1677) やThomas Otwayの*The Cheats of Scapin* (1677)などを精読した。

#### 4. 研究成果

2017年7月に日本ジョンソン協会が開催したシンポジウムにて研究代表者はRestoration and Eighteenth-Century Theatre History: Future Directionsのタイトルで発表を行った。この発

表ではtheatre historyという研究方法が王政復古期から18世紀イギリス演劇研究の中どのように使われてきたかを年代を辿って再考してみた。従ってtheatre historyの研究がどのように進展してきており、現在に至っているのかを検証した。本研究課題を含め、今後の方向性を検討する良い場となった。

その場で貰ったフィードバックを元に、理論を精鋭・発展させて日本ジョンソン協会が発行しているAnnual Bulletin of the Johnson Societyに論考を掲載した。この論考では1670年代にイギリスを訪れたイタリア人の喜劇役者であるチペリオ・フィオレッリ(1608-1694)が王政復古期の演劇に与えた影響について論じた。フィオレッリはロンドンで有名になり、チャールズII世からも寵愛を受けた俳優であったにもかかわらず、当時のフランスの劇作家であったモリエールの方がイギリスの演劇に大きい影響を与えたといわれている。イタリアの劇団はフランスの劇団と同じくらい頻繁にロンドンを訪れていたにも関わらず、なぜモリエールの方がとりざたされるのかその理由について論じた。

王政復古期にやってきた外国人の俳優・芸人たちはイギリス人と対立することも多かったが、18世紀に入るとイギリス劇団の考え方に変化が見られるようになってくる。今後の研究課題として幕間への外国人への起用を始めたイギリス劇団側の変化を詳しく探り、時代と共に移り変わる諸変化を検討して行きたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1. Riki Miyoshi, “Upon the Actors it depends too much”: Scaramouche versus Molière on the 1670s London Stage?. *Annual Bulletin of the Johnson Society* 42 (2018): 19-25.

〔学会発表〕（計 1 件）

1. Riki Miyoshi, “Restoration and Eighteenth-Century Theatre History: Future Directions”, The Johnson Society of Japan, 1 July 2017, Tokyo.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三好 力 (MIYOSHI, Riki)  
金沢学院大学・文学部・講師  
研究者番号：30780788

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )